
コミュニティを探して

(6)

藤 信子

以前合衆国の医療保険制度を少し調べる
ことになった時に、医療費の支払いの方法など
を読んで、そのややこしさに、私はこの国に
は住めないと思ったほどだった。とにかく保
険会社に医療が振り回され、国民が振り回さ
れる感じである（保険に充分なお金が回せる
人はあまり気にしないかもしれない）。その時
から、時々TV で医療保険の宣伝を見ると、
これは日本の国民皆保険が崩壊する前兆かも
知れないという不安を抱く。保険会社が医療
内容に介入することについては、私たちは精

神分析療法が衰退し、合衆国で保険が使えな
くなったことから気づいた。医療費が無尽蔵
にあるわけではない、しかし医療費を抑制す
る、効率的な治療法を研究するという流れの
中で、病院の管理、運営上では見えにくいも
のが、切り捨てられているのではないかとい
うことが、私の周りでもここ数年話題になっ
ている。

サンフランシスコにあるラグナ・ホンダ病
院という救貧院で 20 年間医師として働いた
ビクトリア・スウィートの「神様のホテル」

という本に出合った。「妻を帽子とまちがえた男」などのオリバー・サックスが、是非書くようにと進めたというこの本は、中世の医療を研究している彼女がいろんな患者に会う中で、「心を傾けることを知った」というような、新しい視点へたどるストーリーである。それはまた、ラグナ・ホンダがアメリカの医療・福祉の変革に巻き込まれるのだけれど、これは国の違いを越えて、私の親しい看護師、医師、臨床心理士たちの日ごろの病院の変化への困惑を語ることを思い起こさせ興味深かった。

この「神様のホテル」とはフランス語で救貧院のことをそう呼ぶのだそうである。救貧院というのは、中世ヨーロッパで身の回りのことが自分でできなくなった人の世話をする施設が病院の一種として発展したものだそうだが、合衆国ではこの40年のうち殆どが閉鎖されたという。この40年というのは、1963年の「ケネディ教書」による脱施設化政策、そして人権擁護運動の広がりの影響の中でのことだろうと思われる。そしてこの合衆国で、また欧米の脱施設化、コミュニティ・ケアについては、私たちは評価してきたのだけれど、このラグナ・ホンダ病院の話は、脱施設化、短期入院などを推し進める中で、見すごしてきたものや発見したり、現代の医療について振り返ることを促してくれる。もっともラグナ・ホンダ病院は1963年に単なるシェルターではなくリハビリテーションセンターになっているので、存続してきたのだろうと思わ

れる。

ラグナ・ホンダ病院の敷地は25万平方メートルであると言われても、その広さは想像できにくい。38の病棟があり、温室、ウサギと鶏の檻があり、芝生が広がり、アヒルとガチョウの池があり、七面鳥とヤギのいる小さな丘があった・・・と読むと30年近く前に訪れたメリーランドの州立精神病院の芝生の中に点在していた病棟と比較すると、ラグナ・ホンダは、メリーランドの病院より病院らしくはないような気がする。むしろ日本のしばらく前までの公立の大きな精神病院は、体育館もプールもたくさんの畑や農場を持っていたところもあるので、そんな風景がもっと大きく広がっているのかも知れない。

このラグナ・ホンダにかさむ医療費の対策として医療専門のコンサルティング会社がある。そしてその会社の報告書で「患者のために編み物以外何もしていない看護師長」と言われた人が病棟からいなくなった後、暖かい人間関係が失われたことに作者は気が付き、コンサルタント会社の行った効率の追求について考えさせられる。このような変化からの避難先が、中世の修道女ヒルデガルドの医療の研究だった。そこで現代の医療が見失った「忍耐力、観察能力、患者や環境への洞察力」の大切さを学び、大事な「食事」「安静」「陽気さ」について考える。また、経営、管理の面からの病院の変革から巻き込まれるストレスから逃れるために作者はスペインのサン

チャゴ・デ・コンポステーラへ聖地巡礼に出かける。このヒルデガルドの医療の研究と巡礼が作者にとって、reflectionの機会を与え、そしてラグナ・ホンダで貴重な経験からものに出会えるようになったのだと思う。

第11章の薬物中毒で脳卒中で重体になったギルロイさんの話は、作者のその忍耐力、観察眼、洞察のすばらしさに感動を覚えた。診察することもできない彼女の部屋に行き「しばらく私はそばの椅子に座っていた・・・落ち着かない。私は自分が皮膚から這い出したいと思うような、なにか体の中にある毒素や毒物のような気持ちになった。その時私はふとギルロイさんは毒に冒され、それを排出しようと・・・」と考えセロトニン中毒に気が付くのである。

「ホスピタリティ」の意味について、古代ローマのホスピタリティは「平等なやり取りという意味」であり、旅行者や巡礼者の世話をすることだったが、それは「主人は別の場所では客である」ことを理解する。そして、患者同士の結婚式にラグナ・ホンダのほぼ全員が出席したことから「結婚式は私たちが共に分け合える贈り物であり、分け合うことで私たちはコミュニティになれた」と考える。また時にうさんくさを伴うために、全面的には出さないが「与える者と与えられる者、双方の幸福に寄与する、愛情故に生まれる個人の行動」であるチャリティ。このホスピタリティ、コミュニティ、チャリティがラグナ・

ホンダの大事な3つの原則である。施設型の精神病院の改革の途中まで精神科病院に勤務した私には、ラグナ・ホンダの人間関係も含めた環境は、懐かしいような、難しい課題を含んでいるように思える。作者は実践とヒルデガルド研究の中で、それを超えられたのだろう。そして私たちに医療やケアとは何かを再度考えるように促すのである。

文献

ビクトリア・スウィート、田内志文/大美賀馨訳
(2013) 神様のホテル。毎日新聞社